

令和七年十二月

交通安全皇子供作文集

小・中学校児童生徒の作文第四十八集



未来のために

一般社団法人

愛媛県交通安全協会

後援

愛媛県教育委員会

は　し　が　き

愛媛県交通安全協会・県内十八の地区交通安全協会では、愛媛県教育委員会の後援により、小・中学生を対象に、毎年交通安全に関する作文を募集しています。この趣旨は、小・中学生の情操教育に資するとともに、交通安全についての関心を高め、子供の交通事故防止を図ることを目的に、昭和五十三年から実施しているもので、本年は小・中学校合わせて百二十八校から二千百五十六編という多数の応募がありました。

応募作品について、地元の地区交通安全協会の第一次審査を経た八十四編を、愛媛県交通安全協会の第二次審査で四十五編選定し、更に愛媛県教育委員会に第三次審査をお願いして厳正な審査の上、愛媛県交通安全協会入選作文として二十五編を選んでいただきました。

作文は、子供たちが身近に体験したこと、家族や友達が交通事故の当事者になつたことなど、広く交通安全の大切さについて素直に、かつ、切実に訴える内容となつております。

今回、入選作品二十五編を「交通安全子供作文集」第四十八集として発刊するに当たり、「愛」をシンボルマークとし、題名は、入選作品を代表して、八幡浜市立保内中学校一年生の松本名里さんの「未来のために」とさせていただきました。この作文集が家庭、学校及び職場において、一人でも多くの方に読まれ、交通安全への関心と認識をより一層高めていただければ望外の喜びです。

応募していただいた多くの小・中学生の皆様に感謝いたしますとともに、作文集発刊のためにご協力いただいた関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。県民の皆様には、今後とも交通安全協会の活動にご理解をいただき、一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和七年十二月

一般社団法人 愛媛県交通安全協会会長 宝田洋造

愛媛県交通安全協会入選作文目次

【小学生の部】

おうだんほどうをわたるいみ

じてん車でお出かけ

ぼくの交通安全

自分の命は、自分で守ろう！

かけがえのない命を守るために

歩道橋

ヘルメットの大切さ

命を守るためにできること

交通安全！自分にできること

大切な命

交通事故のない安全な町に

伊予市立郡中小学校

今治市立近見小学校

内子町立石畠小学校

伊予市立郡中小学

西条市立徳田小学校

伊予市立中山小学校

愛南町立城辺小学校

西条市立大町小学校

西条市立石根小学校

今治市立鳥生小学校

鬼北町立近永小学校

一年

二年

三年

四年

五年

五年

五年

六年

六年

六年

六年

池原
いけはら

山田
やまだ

三宅
みやけ

佐伯
さいき

武智
たけち

尾崎
おざき

上岡
うえおか

伊藤
いとう

黒川
くろかわ

吉田
よしだ

悠大朗
ゆうたろう

彩仁
あやと

奈々美
ななみ

結愛
ゆあ

翔月
みづき

愛華
まなか

直空
とあ

清玲
すみれ

翠
みどり

【中学生の部】

予測できない危険から身を守るために

二つの観点からの交通事故防止

毎日通る道を笑顔で

ヘルメットをかぶっていても……

事故の無い世の中へ

命を守るためにの対策

祖父の免許返納と理想の高齢化社会

「交通事故を防ぐために」

未来のために

「自転車と私の約束」

事故は突然やつてくる

事故を未然に防ぐために

ヘルメットの重要性

大切な命を守るために

西条市立東予東中学校	松山市立西中学校	東温市重信中学校	松前町立岡田中学校	宇和島市立城北中学校	愛媛大学教育学部附属中学校	松前町立岡田中学校	大洲市立肱川中学校	八幡浜市立保内中学校	愛媛大学教育学部附属中学校	松山市立三津浜中学校	久万高原町立久万中学校	大洲市立大洲北中学校	西予市立三瓶中学校
一年	一年	一年	一年	一年	二年	二年	二年	二年	三年	三年	三年	三年	三年
稗田	十川	橋本	足立	高月	井上	安村	安川	松本	小田	小林	丸山	宇都宮	井上
ひえだ	そがわ	はしもと	あだち	たかつき	いのうえ	やすむら	やすかわ	まつもと	おだ	こばやし	まるやま	うつのみや	いのうえ
佑翔	咲菜	穂華	七夕桜	咲愛	心希	名里	涼	和佳	悠人	莉央	巧	根	げん
ゆうじょう	さな	ほのか	ななお	えな	ここ	めいり	りょう	わか	はると	りお	たくみ	ねぎ	いのうえ

愛媛県交通安全協会入選作文（二十五編）

【小学生の部】

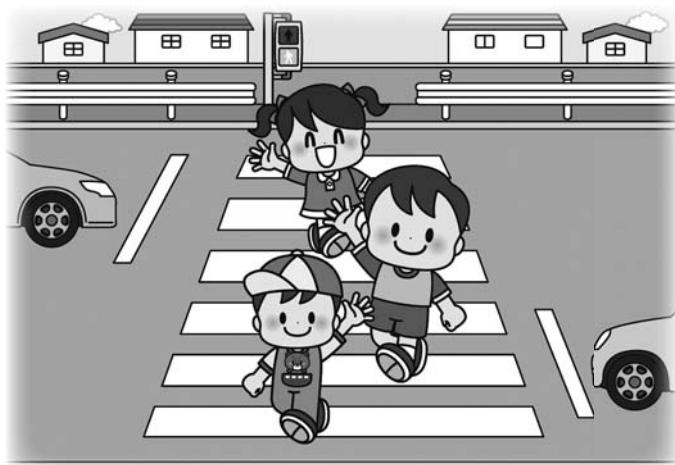
おうだんはどうをわたるいみ

伊予市立郡中小学校

一年 池原 奏翔

ありがとう。」のいみをこめてあたまをさげると、くるまのうんてんしゅさんもあたまをさげかえしてくれたりします。とまつてくれることがあたりまえだとおもわず、これからもありがとうのきもちをもって、あんぜんにきをつけたいです。

ぼくのいえのまえには、おおきなどうろがあります。くるまがたくさんとおっています。そのどうろを、ときどきおとなが、はしってわたつているのをみかけます。よこぎつたほうがちかいから、いそいでいるから、といって、おおきいどうろをわたるのは、あぶないです。いえをはやめにでる、とおまわりでもおうだんはどうをわたるなど、ひとりひとりがじかんによゆうをもつてきちんとわたることがだいじだとおもいます。どうろのまんなかで、くるまのきれめをまつおじいさんも、みたことがあります。あぶなくて、だいじょうぶかなーと、しんぱいしました。きちんとどうろをわたることで、くるまをうんてんするひとたちも、ひやつとすることもへるし、じこをふせげるとおもいます。おうだんはどうをわたるほうも、ほこうしゃしんごうが、あおになつたからといって、すぐにわたらうとせず、みぎひだりをみて、くるまがきていないか、とまつてくれているかをかくにんして、おたがいがきをつけながらわたることがたいせつです。ぼくが、おかあさんと、おうだんはどうをわたるときは、かたほうのではおかあさんとてをつなぎ、もうかたほうのではあげて、とまつてまつてくれているくるまのために、すこしいそぎあしでわたります。そのときに「まつてくれて



じてん車でお出かけ

今治市立近見小学校

二年 三宅 憲大朗

ぼくは、学校からいえにかえつてからや、お休みの日にじてん車にのつて近くの公園に行つたり、おかいものに行つたりします。

じてん車は、スピードも出るし、細い道もかんたんに行けるのであるくよりも早く行きたいところに行けます。ぼくは、じてん車にのるのが大すきです。

ぼくには、四さいのいもうとがいます。いもうともほじよりんのついたじてん車にのれるのでいつしょにじてん車でおでかけします。でも、ぼくといもうとだけだとあぶないのでおでかけするときは、お母さんやお父さんとかならずいつしょに行くようにしています。じてん車にのるときには、お母さんが、「じてん車にのるときには、ヘルメットをしつかりかぶらうね。」といつも言つてくれます。

ぼくは、じてん車にのれるようになったとき、ヘルメットをかぶるのがイヤでした。おもたいしあついし、なんでヘルメットをかぶらないといけないのだろうと思つていきました。お母さんに、かぶりたくないと言つたこともあります。そのときに、お母さんが、「ヘルメットは、悠大ろうのあたまをまもつてくれる大じなものだよ、いのちをまもつてくれるよ。」

とおしえてくれました。お出かけのときもヘルメットをかぶつている大人もたくさん見ます。

ぼくは、あたまをまもるためにしつかりヘルメットをかぶつています。いもうとにも、ぼくがヘルメットをかぶせてあげます。じゅんびができたら出ぱつです。近くの公園に行くときも、おかいものに行くときも車がたくさん通る道を通つて行かないといけないので、車に気をつけてゆつくりはしります。道をわたるときは、おうだんほどうをわたります。右を見て、左を見て、もう一回右を見て車がきていないのを見てからわたります。

お父さんやお母さんから、

「車に気をつけて、じてん車をおしてわたるよ。」

とおしえてくれます。

ぼくは、二年生になつたので、あたらしいじてん車をかつてもらいました。すごくかっこいいです。でも、そのじてん車にのるときのおやくそくもあります。ヘルメットをかなならずかぶること、まわりをしつかり見てはすること、一人ではぜつたいにのらないことです。

このおやくそくをしつかりまもつて、こうつうルールをもつとおべんきょうして楽しく大すきなじてん車にのりたいです。そして、いつもおしえてあげたいです。

ぼくの交通安全

内子町立石畠小学校

三年 山田 彩仁

ぼくの住んでいるところは、交通じこのない、安全なところだと思います。山にかこまれた、しづかでいいところです。大きな道路はあまりありません。信号きもありません。車もあまり通らないので、あぶない目にあつたことはありません。

ぼくは登下校のとき、ちゃんと交通ルールをまもっています。横だん歩道をわたるときは、右左をよく見て、手を上げてわたつています。ちゃんとならんで歩いています。

でも、ちよつとかわったルールがあります。それは、登校するときは、道路の右がわを歩きますが、下校するときは、道路の左がわを歩くというルールです。ぼくは一年生のときから毎日歩いています。このルールは、ずっと前から続いているそうです。それがあたり前だと思つていたけど、どうしてなのか考えていました。

交通安全教室のときも、道路の左がわを歩く練習をしました。そのとき、おまわりさんが、「このあたりの道は、カーブがきついので、車から歩く人が見えないんだよ。だから、帰りは、左がわを歩いたほうが安全なんだよ。」と教えてくれました。下校のとき左がわを歩くというルールは、ぼくたちの安全をまもるためにあるんだということが分かりました。

だから、ずっと前からこのルールがうかつがれてきていたんだと思いました。

車が来るのがわかつたら、早めに道のはしによけて、まつことがあります。車を運てんする人も、ぼくたちに気がついて、スピードをおとしてくれます。だから安心で安全なとてもいいルールだと思いました。だからぼくは、このルールをしつかりまもつていきたいと思います。来年、弟が一年生になるので、ぼくがしつかり教えてあげたいです。

でも、しゅうだん登校のときに、ちよつとだけ、気をつけたらいなと思うところがあります。おしゃべりにむちゅうになつて、白線から出て歩いていたことがありました。雨の日に、かさをさして歩いていたとき、友だちとぶつかってけんかになつたことがあります。よく考えると、これらのことも交通じこにつながることがあると思いました。

いつも同じがわを歩くという地いきのルールだけで安心ではなく、自分たちが気をつけることもたいせつだと思います。いろんな交通ルールを知りたいと思いました。

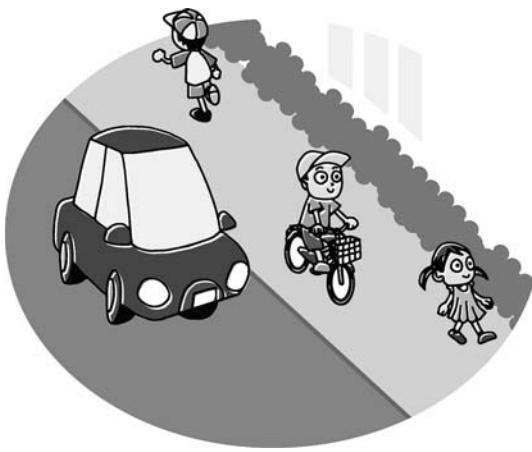
ぼくの住んでいるところでは横だん歩道で車はすぐとまつてくれます。あいさつをしたり、にっこりわらつてくれたりします。車を運てんしている人はぼくのよく知つてる人や、顔見知りの人ばかりです。みんな思いやりの気持ちをもつてくれているんだと思いました。みんなやさしいです。だからぼくは、家の近くでは、あぶない目にあつたことが、なかつたんだと思います。

でもほかのところでは、すごいスピードで走つている車を見たことがあります。道路が広くても、スピードの出しすぎはこわいです。

車を運てんする人におねがいがあります。いそいでいても安全運てんをしてください。自分がよく知つている人が道を歩いていると

そうぞうして、やさしい気もちで運てんしてください。そうすれば、じこのない平和な世界になると思います。

ぼくはこれからも交通ルールをまもつていきたいです。地いきのとくべつなルールだけじゃなく、ほかにもたくさんのきまりやルールがあると思います。これからも交通ルールについて、しつかり学んでいきたいです。



自分の命は、自分で守ろう！

伊予市立郡中小学校

四年 武智 結愛

私は、最近新しい自転車を買つてもらいました。お気に入りのかわいい自転車で、前よりもスイスイこげるで、少し遠くまで行けるようになつて、とてもうれしいです。うれしくていろんな所に行きたくなるけど、交通ルールを守らないとあぶないこともあると気づきました。

一つ目は、ヘルメットをかぶることです。理由は、もしも転んだときに頭を守るためです。あついけど、しつかりあごひもをしめてかぶります。

二つ目は、自転車に乗るときは必ず左がわを一列で走ることです。車やほこう者の人にめいわくにならないようにするためです。

三つ目は、おうだんほ道をわたるときは、自転車をおりて安全にわたることです。ほこう者の人にぶつからないように気をつけます。

四つ目は、自転車でもとび出しをしないことです。「右・左・右」をよく見て、安全にわたります。

とくに私が気をつけていることは、一つ目のヘルメットをかぶることです。前にテレビで事このニュースを見て、ヘルメットをかぶつていなかつた人が大けがをしていました。ヘルメットをきちんととかぶついたら軽いけがですんでいたかもしれないと思いました。だから、「カッコ悪い」とか「めんどくさい」と思つても、自分を大切にするために、ちゃんとかぶることが大事だと感じました。周りの友達

がヘルメットをかぶっていなくても、みんなに流されずにしつかりか

ります。ヘルメットをかぶっていない友達がいたら、頭を守ること

の大切さと、ヘルメットの役わりを教えてあげたいです。

私たちがくらす愛媛県は、よく事こが多いと聞いたことがあります。調べてみると、今年に入つて七月までに、人口十万人当たり交

通事こでなくなつた人が全国で一番多く、ほかの県とくらべても悪い結果でした。また、自転車に乗つていた人のなくなつた数もふえているそうです。この結果を見て、事こは他人事ではなく、自分もまき込まれるかもしれないと思いました。そして、もしかしたら自分が人をきずつける立場になつてしまふかもしれないと知りました。

最近では、ほうりつで自転車の交通ルールがもうけられました。車のように、自転車も大きな事こにつながるきげんがあるということだと思います。私にできることは、自転車に乗るときにはヘルメットをかぶつて自分を守ること、交通ルールを守ることです。いつ事こにあうかわからないから、自分の命は自分で守るという意しきを持つことが必要だと思います。新しい自転車でのお出かけが、安全で楽しい思い出いっぱいになるように周りをよく見て、気をつけてすごしたいです。

かけがえのない命を守るために

西条市立徳田小学校

五年 佐伯 奈々美

交通事故のニュースを見て、母と姉が話をしていました。私も最近、交通事故にあつている人が多いと感じていました。母の、「この事故は、ヘルメットをしていたから助かつたよね。」と言う一言をきっかけに、家族で交通安全について話し合いをしました。

まず、家族が体験した交通事故の話を聞きました。

一つ目は、一番上の姉が中学生のときのことです。姉は、登校中に、通学路の標識がある道で車と接触する事故にあつたそうです。幸い、ヘルメットをかぶつていたので、軽傷ですんだとのことでした。私は姉の話を聞いて、

「姉が無事でよかったです。」

と思いました。そして、ヘルメットはとても大切だと感じました。事故にあつたとき、姉がヘルメットをかぶつていなかつたらと考へると、もつと大変な事故になつていたのではないかとも考えました。私は、通学路でも気を付けないといけないと思いました。

二つ目は、もう一人の姉が中学生のときのことです。姉は、登校中に車を避けて二メートル下の川に落ちてしまつたそうです。この時も、ヘルメットをしつかりとかぶつっていたので、すり傷ですんだとのことでした。この時も、事故が起つた場所は通学路だつたそうです。私たちが通学する時間帯は、通勤する車もたくさん通る時間帯です。

私は、ヘルメットをきちんとかぶることの大切さを改めて強く感じました。

家族との話合いを通して、事故は身近なところにもたくさんあることが分かりました。私は、姉たちの体験から、自転車に乗るときにきちんとヘルメットをかぶることはもちろんですが、普段の上下校でも周りをきちんと確認して、安全に通学しようと思いました。

自転車に乗るときに、ヘルメットをかぶっているときとそうでないときでは、事故があつたときに大きなけがを負つてしまったり、命を落としてしまつたりする危険性に、大きな違いがあります。

インターネットで調べてみると、警視庁の資料では、二〇一二〇年から二〇一四年の間に自転車乗車中の交通事故で亡くなつた人のうち、五十パーセントは頭のけがが原因だつたそうです。

頭のけがが原因で亡くなつたり、重傷を負つたりした人のうち、ヘルメットをかぶつていらない人の割合は、かぶつている人の割合の約二倍近くになるそうです。また、二〇一二四年の愛媛県のヘルメット着用率は約七十パーセントで、他の都道府県と比べると、着用率は高くなっています。

しかし、私は、ヘルメットをかぶつていない人がいるのはどうしてか気になりました。

そこで、なぜヘルメットをきちんとかぶらない人がいるのか調べてみました。すると、ヘルメットをきちんとかぶらない人が多い理由として、二つのことが分かりました。

一つ目は、自転車乗車中にヘルメットをかぶることは努力義務で、罰則などは設けられていないことです。罰則がないからという理由で、ヘルメットをかぶらない人が多いそうです。わたしは、法律で罰

則が設けられていなくても、ヘルメットをかぶることは、自分の命を守るためにも大切なことだと思います。

二つ目は、脱いだヘルメットを運ぶことやヘルメットをかぶることが面倒だということです。確かに、運ぶことやかぶることが面倒で、かぶりたくないと思う人もいると思います。しかし、わたしは、かけがえのない命は何ものにも代えられないので、必ずヘルメットをかぶつてほしいと思います。

このように、家族と話し合つたり、自転車乗車中の事故について調べたりすることを通して、事故につながる危険なことは、身近なところにも潜んでいることが分かりました。

私は、きちんとヘルメットをかぶつて安全性を高めたり、周りをきちんと見て危険な場所がないかを確かめたりしたいと思います。そして、家族と話し合つたことや調べて分かったことをこれから的生活に生かして、かけがえのない命を守つていきたいです。



歩道橋

伊予市立中山小学校

五年 上岡 美月

いかと思います。一つしかない大切な命を守るために、私も交通ルールをしつかり守っていきたいです。

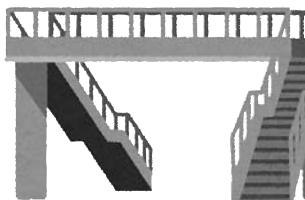
私の住んでいる中山町には、町の中心の道路に交差点があります。

そこには横断歩道があり、そのすぐ近くに歩道橋もあります。私たち中山小学校の児童は、この横断歩道は渡らずに、歩道橋を渡りましょう、というルールがあります。どうして横断歩道があるのに歩道橋があるんだろう。なぜ、小学生は歩道橋を使うようになつたんだろう。先生から理由を聞くまでは、あまり深く考えてはいませんでした。

先生が話してくださいたのは、今から何十年も昔の話でした。当時、小学六年生の男の子が横断歩道を渡っていたところ、交通事故にあつてしまい、残念ながら亡くなつてしまつたという話でした。その事故があつてから、中山小学校の児童は、横断歩道を渡らずに歩道橋を渡りましょう、というルールができたそうです。

でも実は、私が最近できていないことがあります。それは、横断歩道を渡るときに大きく手を擧げることです。小さい頃は何も思ひませんでしたが、今は少し恥ずかしいと感じことがあります。それでも、大きく手を擧げることにはきちんと理由があります。大きく手を擧げることで、運転手さんに自分がいることを気付いてもらおうためです。歩道橋を渡る理由と同じで、守るべき交通ルールには、きちんと理由があります。事故にあつて家族を亡くした方は、命が助かる方法があつたのではないかと、今でも悩み続いているのではな

私は、横断歩道を渡つてはいけない理由を知ったこととお母さんの話を聞いたことはよかつたなどと思いました。もうこれ以上、悲しい事故が起こらないように、私も歩道橋を渡つて、交通ルールを守らうと思いました。



ヘルメットの大切さ

愛南町立城辺小学校

五年 尾崎 翔空

た病院では、

「どうにもできない。」

と言わされました。すぐに他の病院にはん送されました。その時、救急車の中でも父さんに

「ヘルメットをかぶつとつてよかつたね。」

と言われました。ヘルメットに命を救われたのだと思いました。複雑こつ折という大けがだつたけど、ヘルメットのおかげで大切な命は無事でした。

「きん急手術をします。」

こんな大けがになつているとは思わなかつたので、この言葉を聞いてなみだが出ました。夜十時からきん急手術をしました。しかし、なかなかうまくいかず、次の日も手術をしました。父さん、母さん、兄ちゃんが来て、はげましてくれたのを今でも忘れません。そして、入院中、母さんがずっとそばにいてくれたことに感謝しています。

四日後、無事に退院することができました。退院して一番に、助けに来てくれたおじさんにお礼を言いに行きました。ぼくにとつておじさんは命のおん人です。その時、おじさんにまた、「ようヘルメットをかぶつとつたね。」

と言われました。おじさんは最後までヘルメットの大切さを教えてくれました。その言葉が温かくて、うれしかつたです。

学校が始まつてすぐに運動会練習が始まりました。しかし、ぼくは再こつ折のおそれがあるため、参加できませんでした。くやしくて仕方がありませんでした。それから、手術をして一ヶ月後、無事にギブスを取ることができました。でも、その時病院の先生から、「三か月後にもう一回手術をがんばろう。」

春休みに友達とサイクリングに行きました。公園に着いたら、野球をして遊びました。五時のチャイムが鳴つたので、友達と山道から帰ることにしました。その帰り道、下り坂でスピードを出し過ぎてしまい、カーブを曲がり切れず、自転車ごとみかん畑に落ちてしまいました。誰もいない場所で、痛くて動けませんでした。だんだんと辺りがうす暗くなつてきました。どうにかして誰かに気付いてもらおうと、力の限り声を出して助けを求めました。

「助けてください！助けてください！」

痛くて痛くてたまらなかつたけど、必死に声を出し続けました。すると、おじさんが助けに来てくれました。その時、ぼくは安心しました。

すると、おじさんが、「君えらかつたね。ヘルメットをかぶつとつたけん頭打たんですんだね。よかつたね。」

と言つてくれました。その後、病院に救急はん送されました。救急隊の人にも、「ヘルメットをかぶつていなかつたら命がなかつたよ。」

と言わされました。ぼくは、ヘルメットをかぶつていて本当によかつたと思いました。ぼくのけがは思つたよりもひどく、救急車で運ばれ

と言われて、ぼくは少し元気がなくなりました。それから毎日リハビリをして、うでをのばす練習をしました。

夏休みに入り、三回目の手術をしました。家族に、

「これで終わりやけん、がんばれ。」

とほげまされ、入院しました。また全身ますいです。あの痛みを思

い出すだけで不安で仕方がありませんでした。無事に三回目の手術も終わり、退院することができました。やつとやりたいことができると思うと、一安心でした。

ぼくは、あの時の事故を一生忘れません。ヘルメットは人の命を守る大切な役割があることを実感することができたからです。これからも、自転車に乗るときは必ずヘルメットをかぶり、交通ルールを守ります。ヘルメットの大切さを友達にも伝えていきます。友達には、あの痛み、あの思いを絶対に味わってほしくないからです。ぼくの大切な人達が、これからも笑顔で過ごせる毎日になるように、交通安全の大切さをもっと広めていきたいです。



命を守るためにできること

西条市立大町小学校

六年 伊藤 愛華

「たった数分のちがいで、命を失うかもしれない。」これは、小学校の先生が語った言葉だ。初めは大げさに言っているように聞こえたが、最近、自転車でもヒヤッとする体験をしたことで、その言葉の重みを実感するようになった。

ある日、友達との約束に間に合わなくなりそうになってしまい、急ぎ足で自転車をこいでいた。信号が赤色になりかけた交差点で、止まるか進むか一瞬迷った。結局、止まる判断をしたのだが、その後の数秒後、すごいスピードで車が通過していった。

「もし、そのまま進んでいたら……。」

そう考えるだけで、こわくなる。交通ルールの大切さを体感したしゅん間だった。

交通事故は、だれにも起こりうる身近なけん。令和の時代になつても、年間でたくさん的人が命を落としているという現実がある。その多くは、「ほんの少しの油断」や、「急ぎたい気持ち」が引き金となつていて。だからこそ、ルールを守るだけでなく、相手の動きに注意を向ける「思いやりの運転」や、「きけんを予測する力」が必要だと思う。

学校でも「交通安全教室」があり、交通安全についての話やシミュレーション体験などがあるが、正直なところ、その日が過ぎると記おくや意識はうすれてしまう。だから、本当に大切なのは、日常の

中でどれだけ意識を持ち続けられるかだと思う。通学路での歩行者、信号無視をする自転車、スマホを見ながら運転するドライバー・・・。

それぞれが一つのリスクになり得る。

最近では、自転車の技術の進化や車の安全機能も向上している。

しかし、技術にたよるだけでなく、人間の「判断」と「思いやり」があつ

てこそ真の安全は守られると思う。たとえ数分おくれたとしても、安全に行動することで、自分と相手の命を守ることができると思う。

交通安全は、特別なことではなく、「いつもの行動」に宿るもの。

今日も、横断歩道の前で止まり、相手の目を見て、「大丈夫」と「ありがとう」の気持ちを交わせた。それだけで、社会は少しやさしくなつたような気がした。

これからも「小さい行動」や「判断」、「思いやり」を大切にして、自分や相手の命を守る行動をたくさん積み重ねていきたい。そして、自分や相手の命を大切にしていきたい。

ぼくが学校に行くときには、横断歩道を渡る。その横断歩道は、車通りの多いところにあるけれど、信号機がない。だから、駐在さんや見守りボランティアの方が、毎日そこに立つて、ぼくたちを渡してくれている。

ある日、登校班の友達と横断歩道を渡ろうとしていたときのことだ。駐在さんや見守りボランティアの方が、いつものように横断歩道の真ん中に立ち、ぼく達を渡してくれようとしていた。また、横断歩道の横では、車が止まっていた。そのとき、止まってくれている車を後ろから追い越してきた車がいた。本当に事故になりかけた。みんな無事でよかつた。横断歩道でも、油断してはいけないと心の底から思つた。

ぼくは、この事が起きてから、横断歩道を渡るときに絶対に気をつけようと思っていることが三つある。

一つ目は、駐在さんや見守りボランティアの方が車を止め、「渡つていいよ。」と、言つてくれたときでも、自分で左右を見てから渡ることだ。大人が車を止めてくれていても、追い越してくる車がいるかもしれない。自分で左右を必ず確認してから渡ることを登校班の

交通安全！自分にできること

西条市立石根小学校

六年 黒川 直



友達にも伝えたい。

二つ目は、車を運転している人に、横断歩道を渡つていると分かってもらえるように、大きく黄色い班長旗を振ることだ。特に、トラックの人には渡つているのが見えないときがあるので、大きく黄色い班長旗を振つて、渡つてることを知らせるようになっている。

三つ目は、止まつてくれた車に、「ありがとうございました。」とお礼を言うことだ。朝、急いでいるかもしれないけれど、ぼくたちが渡るときに止まつてくれたので、きちんとお礼を言うことが大切だと思う。班長のぼくが、しつかりあいさつをして、下の学年の友達の見本になりたい。

六月には学校で、交通安全教室、交通安全キャンペーンがあつた。交通安全教室では、自分の自転車に乗り、障害物に当たらないようにハンドルを操作したり、急ブレーキをかける練習をしたりした。実際の道路でも、練習したことを生かしたいと思った。

交通安全キャンペーンとは、警察の方が道路通行中の車を止め、横の広場に誘導し、小学生のぼく達が、交通安全のお願いをするというものだ。ぼくたちは、運転手の方に、石根小学校で育てている篤山椿と、交通安全へのお願いの手紙を渡した。ぼくは渡すときに、少しでも交通事故がなくなるようにと思いながら、

「交通安全をお願いします。」

と言つて渡した。運転手の方は笑顔で、

「ありがとうございます。」

と言つて、受け取つてくださつた。運転手の方にお願いしたから、自分は何もしなくていいわけじやなく、ぼくも特に自転車の乗り方に気を付け、事故にあわないように、心掛けたい。

この交通安全キャンペーンは、石根小学校で四十二年前から続いている伝統ある行事だと聞いた。この伝統ある交通安全キャンペーンに参加できてよかつた。これから先も、ずっと長く交通安全キャンペーンが続いてほしい。ぼくの家族や周りの人にも交通安全を呼び掛け、自分自身も交通安全に十分気を付けて生活していきたいと思う。



大切な命

今治市立鳥生小学校

六年 吉田 清玲

テレビのニュースで目にする交通事故。自分には関係ないとthoughtいても、みなさんの身近に危険はひそんでいます。

私のひいおばあちゃんは交通事故で亡くなっています。その話を聞いた時、すごく悲しい気持ちになりました。そこで、おじいちゃんにくわしく話を聞きました。

私のひいおばあちゃんはおじいちゃんが三才の時に車のひきにげ事故で、三十三才の若さで亡くなつたそうです。おじいちゃんは小さかつたので、ひいおばあちゃんとの思い出が少ないのは悲しいだらうなと思います。もしも事故にあわなければ、もっと長生きできて、おじいちゃんととも幸せに暮らせたのではないかとすると、切ない気持ちになりました。

事故を起こした人はつかまつていないと聞き、もっと悲しい気持ちになりました。おじいちゃんは、「自分で罪をつぐなつてほしい。」と、話していました。そして私がと、質問すると

「三人の孫にめぐまれて幸せだよ！」
と、話してくれました。お母さんが死んでしまつて悲しいはずなのに、お母さんに

「自分は今、とても幸せだから、心配しないで！」

と、言えるおじいちゃんはすごくかっこいいなと思います。私なら「お母さん、なんで死んじゃつたの？」

と、言つてずっと泣いてしまうはずです。それは、おじいちゃんが優しくて強いから言えるのだと思います。私の自慢のおじいちゃんです。

おじいちゃんは、七十七才の時に運転免許証を返納しました。おじいちゃんから運転免許証の返納を迷つてている高齢の者へ伝えたい事は、自分は大丈夫だと思っていても、家族や周りの人から返納をすすめられたら、運転免許証を返納した方が安全で、自分は返納して良かっただと思ってているそうです。

事故を起さないために大切な事は、なるべく時間と気持ちによゆうを持つて、横断歩道でもしっかりと安全を確認する事が必要だと教えてくれました。おじいちゃんには、ひいおばあちゃんの分まで長生きしてほしいなと思います。

防げる交通事故はたくさんあると思います。「相手が止まってくれるから大丈夫」ではなくて「自分の命は自分で守る」自分が止まることが大切だと思います。そして、この作文を読んでくれた人が交通事故を防ごうと思ってくれることで、交通事故が一件でも減ることを願っています。

交通事故のない安全な町に

鬼北町立近永小学校

六年 中村 翠

私の住む町は、山が多く、水もきれいです。家の近くには、イノシシやシカ、野ウサギ、サルなどが現れる自然豊かな所です。都会と比べて自動車や自転車、歩行者の数はとても少ないので、朝や夕方は仕事の行き帰りや上下校で交通量が多くなります。

私の家の近くには、友達があまり住んでいません。遊びに行く時には、一番近くの友達の家でも自転車で行くしかありません。友達の家で遊んで、自転車で帰るころには夕方になり、昼間よりも交通量が増えます。私は、その横を自転車で通るので、いつもヒヤヒヤしながら走ります。これまでに、何回か自転車でこけて、軽いけがをしたことがあります。でも、きちんとヘルメットをかぶっていたので、大きなかがをしたことはありません。ヘルメットの大切さが分かっているので、これからもあごひもを力チツと留めて、安全に自転車に乗りたいと思います。

私は事故にあつたことはありませんが、いつも渡る横断歩道でこわい体験をしたことがあります。それは、夜の交通量が多い時に、その横断歩道で自動車と歩行者がぶつかるという事故を見たのです。歩行者はきちんと横断歩道を渡っていたのに、自動車にはねられたのです。その時、私は家族と買い物に行く途中でした。自動車がたくさん停まっていて、何事かなと思って見てみると、人が倒れていました。私の父は消防士なので、すぐにその人を助けに行き、近くの

消防署の人を呼び、倒れていた人を救急搬送しました。また、母は警察の人がまだ来ていなかつたので、たくさん停まつていた自動車を安全に移動させていました。私がいつも渡つている横断歩道で事故が起き、もつと自動車に気を付けて渡らなければいけないと思うようになりました。その後、事故は起きていないので、安心しています。気を付けていても交通事故にあうことがあります。交通事故にあわないように、私は、次のことに気を付けようと思います。

一つ目は、道路を横断する時は、必ず確認しながら渡ることです。歩行者が優先だからといって左右を見ずに渡ると、運転している人が気付いてない場合があるかもしれません。横断歩道を渡るときは手を挙げたり、左右を自分の目でしつかり確認したりしたいです。

二つ目は、信号をよく見て渡ることです。歩く時も自転車に乗る時も、きちんと止まつて信号を確認したいです。

そのほかに、事故がなくなるように、ポスターなどで呼びかけることもよいと思います。町のみんなの目を引くようなメッセージ性の高いポスターがよいと思います。

私の住む町やみんなの住む所が、事故のない安全安心に過ごせる場所になつてほしいと願っています。これからも交通ルールを守り、上下校も遊びに行く時も、安全に考えて行動していきたいです。

【中学生の部】

予測できない危険から身を守るために

西条市立東予東中学校

一年 稲田 佑翔

皆さんは、乗り物でヒヤッとした経験はありませんか。僕は先日、生まれて初めて命の危険を感じました。それまでは、交通安全の大切さは分かっていても、どこか他人事のように思っていたのです。しかし、この出来事を通して、それがとても身近な問題であることだと考えるようになりました。

僕たちの中学校では、ほとんどの生徒が自転車通学をしています。僕も入学と同時に自転車での通学を始めました。自転車は速くて便利な乗り物です。重たいカバンを後ろに積んでも文句ひとつ言わず、僕がペダルを強くこげば、それに応えて一緒に走ってくれる、まるで相棒のような存在です。

入学から二ヶ月ほどして、学校で交通安全教室が開かれました。実際の事故の事例を聞いたり、自転車の実技講習を行ったりして、安全に登下校するための注意点を学びました。僕も、「ルールを守り、正しく運転することが大切だ」と強く感じました。

しかし、日常に慣れてくると、その「当たり前」が崩れる瞬間がやってくることがあります。毎日通学するうちに、運転に自信が付き、僕は次第に友達とおしゃべりをしたり、スピードを出したりするようになっていました。そんな油断をしていたある日、ヒヤッとする出来事が起きました。

たのです。

それは、部活動の帰り、夕方のことでした。空が暗くなりはじめ、僕は疲れた体で自転車をこいでいました。ヘルメットの間から垂れてくる汗をタオルで拭き、「晚ごはんは何やろう」などとぼんやり考えていたとき、見通しの悪い三差路にさしかかりました。いつもなら、僕は、カーブミラーを確認してから通るのですが、そのときは注意をおこたつてしましました。

突然、脇道からグレーの車が飛び出してくださいました。僕はあわててブレーキを握りしめ、ハンドルと一緒に心臓を握りつぶすような感じがしました。幸い、相手の車も急ブレーキをかけ、ぎりぎりでぶつからずに済みました。運転していたのは六十代くらいの男性で、まん丸な目で僕を見つめ、ガラスの向こうで「だいじょうぶ?」と口が動いているのが見えました。僕も小さくうなずき、互いに頭を下げて交差点を離れました。気付くと、汗を拭いていたタオルごとブレーキを握っていて、身の危険を感じて必死の行動を取ったことを実感すると同時に、冷や汗が止まりませんでした。

帰宅後、家族にこのことを話すと、もちろん大いに叱られました。そして、何がいけなかつたのかという家族会議となりました。この話合いでも、僕は、どれだけ疲れていても、急いでいても、安全に対する意識を保つことが必要だと実感しました。今回は、自転車の運転に慣れてきていたことが、油断につながったと思います。家に着くまでが通学です。油断しないで、安全運転を心がけるべきでした。

その後、令和六年中の交通事故の件数を調べてみました。警視庁の発表によれば、全国で約三十万件もの事故が発生しています。とても多いと感じました。原因の多くは「人的要因」つまり、今回の体験のような判断ミスや注意不足によるもので、全体の八割以上にも上ります。事故

にはならなかつたけれど、僕のようないくつも危ない経験をした人の数は、その何十倍にもなるのではないか。

ここから、もう一つの大切なことが見えてきました。それは、自分も含めて「人間の行動を信用しすぎてはいけない」ということです。車は来ていらないだろう、相手が止まつてくれるだろう、ミラーを確認したつもり……。そんな、小さい思い込みや不注意の積み重ねが、大きな事故を引き起こしてしまつのだと思います。

安全性を高めるために、自分でもできる備えはあります。ヘルメットの着用はもちろん、自転車の整備をしておくことなどです。規則を守ることや、日常点検の習慣は、予測外で危険な状態になつたとき、身を守つてくれるものだと思います。また、失敗しない、いつも完璧な人はいないからこそ、規則を守る意識が大切なのだと思います。

これからは、安全に生活するため、面倒だとは思わず、普段からルールやマナーを守つていきたいです。規則は覚えるだけでなく、きちんと守ることで自分を守つてくれることを学びました。そして、これらのこととを体験と共に、友人たちにも伝えていきたいと考えています。

今現在、愛媛県内では交通事故が非常に多く起つています。そのため、七月七日から十六日まで、愛媛県に「交通死亡事故多発緊急事態宣言」が発令されていました。愛媛県では、今年に入つて既に交通事故で三十人がし死亡しています。人口十万人当たりの死者数二、四三人は、全国ワースト一位です。全国平均〇、九六人と比較しても、愛媛県は突出した数値となつています。宣言を行つたにも関わらず、現在も交通事故は続いています。そこで、私なりに個人的な観点及び組織的な観点からの交通事故防止について考えてみたいと思います。

私が通学中のときのことです。狭い道を歩いていたとき、車が勢いよく曲がつきました。狭い道なので私は端によけていましたが、車は猛スピードで通り過ぎていきました。運転手は、「今急いでいるのに何でこんな所を子供がウロウロ歩いているんだ。」とても言ひたげな、不機嫌そうな顔をして。「狭いし、危ないから、気を使つてゆっくり走つてくれればいいのに。」と思いました。その時、私はふと考えました。もし私があの車に気付いていなければ、どうなつていたのかと思うと、たつた数秒間の出来事なのに、しばらくの間、心臓がドキドキして苦しかつたことを覚えていきます。

私はピアノを習つてゐるのですが、ピアノ教室から帰つていたときのことです。私は交差点で、信号が青だったので渡つていきました。す

二つの観点からの交通事故防止

松山市立西中学校

一年 十川 咲菜



ると、左折してきた車に急ブレーキをかけられました。そして、またもや運転手に嫌そうな顔をされてしまいました。

このような経験から、私は交通ルールを守っていても、事故にあうことを見知らされました。自分がどれだけ交通ルールをしつかりと守つていようと、相手が交通ルールをきちんと守ってくれるかどうかはわかりません。そして、私は交通マナーを守ることが交通事故を減らすためには大切だと考えました。特に、運転手の方には優しい気持ちを持つて、交通マナーに気を付けてもらいたいと思います。マナーを守るということは、他者への思いやりとなり、それが転じて事故を防ぐ鍵になるのではないかと思います。また、運転手だけでなく、歩行者にとっても、交通ルールを守るということは、交通安全のために必要なことですが、相手が交通ルールを必ず守るとは限りません。また、相手は自分のことが見えておらず、気付かない場合もあります。いくら自分自身が交通ルールを守つっていても交通事故にあわないとは、限らないのです。

歩行者として交通ルールを守ることは必要最低限のことだと考えるとともに、相手が交通ルールを守るとは限らない、ということを意識する必要があります。交通事故につながりそうなことを連想、想定し、十分気を付けることが交通事故防止につながることだと、私は思います。

このようなことは、日頃から学校でも教えられている大切なことです。が、毎日のことでもあり、さらに急いでいるときなどは特に、気が緩んでしまいがちです。

交通事故はいつだれのもので起こるかは分かりません。だからこそ、もっと交通事故防止の意識を持つべきだと思います。残念ながら、

今は歩きスマホやながら運転をする人が多くいます。そんな人たちに伝えたいです。たった一度の不注意で、命が奪われたり、奪つてしまったりすることがあるのだと。

交通事故防止のためには、個人の意識を変えることが重要であると述べてきましたが、組織的な取組についても考えてみます。

数年前から、「横断歩道を渡るときは、車は必ず止まる」というスローガンのもと、歩行者の安全確保を目的とした、啓発活動が実施されてきました。

私の祖父は、ウォーキングをやっていますが、このスローガンが出されてから愛媛県民の意識が高まり、横断歩道で止まってくれる人が増えた。最近運転手さんの意識が変わっていくのを実感できた、と話してくれました。また、愛媛県の自転車ヘルメットの着用率は、昨年七月の調査では、六九、三パーセントであり、全国平均の十七、〇パーセントを大きく上回っています。

これは、一〇一三年四月一日の道路交通法改正において自転車利用者のヘルメット着用が努力義務となりましたが、愛媛県内では、それ以前から条例等によつて積極的に取り組んできた成果だそうです。

これらのことからも、愛媛県の「交通死亡事故多発緊急事態宣言」や、「横断歩道を渡るときは、車は必ず止まる」という取組、「自転車利用者のヘルメット着用推進」への取組等により、課題となる案件を一つ一つ解消していくことも、交通事故防止につながる重要な手段だと思います。

毎日通る道を笑顔で

東温市立重信中学校

一年 橋本 悠叶

交通事故。交通事故は、時に一瞬で人の命を奪うもの、また、その

人の家族の人生を変えてしまうとても恐ろしく、悲しいものだ。日々、通勤や通学、娯楽など、日常生活を送るためにたくさんの人々が様々な交通手段で外出している。外出するということは、いつ誰が交通事故の被害者・加害者になつてもおかしくないのだ。日々、年齢や性別関係なく、誰もが交通事故の危険と隣り合わせであることを忘れてはならない。

僕は、毎日徒步で通学している。そこで、毎日当たり前のように通っている通学路に危険個所がないかを調べてみることにした。僕が危険だと感じる箇所は四つだった。一つ目は、片側通行しかできない細い道だ。この道は車の通行量が多く、左右が田園で、時々車が田園に落ちているのを目撃することがある。この道を通らないと学校へは行けないが、歩行者専用道路もなく左右に白線も引かれておらず、とても危険な道だと感じる。二つ目は、友達と待ち合わせをしている横断歩道だ。この場所は最近、信号機が付き、たくさんの小中学生が利用している。信号機が付いたことで、歩行者は安全に横断できるようになつたが、車の運転手は、これまで信号機がなかつたため、赤信号に気付くことがおくれてしまい、急ブレーキを踏んでいる様子を見ることがある。三つ目は、歩道と歩道の切れ目の脇道から車が出てくる場所だ。似たような場所は他にもあつた。歩行者・運転

者ともに、「来るかもしれない」というふうに意識しないといつ衝突事故が起こつてもおかしくない場所だと感じた。四つ目は、学校付近の場所だ。中学校と高等学校が近く、通学時間も重なつてゐるため、徒步や自転車での通学生で混雑している。車の交通量も多く、信号のない横断歩道もあり、それぞれが自分勝手な行動をしてしまうと大きな事故が今にも起きてしまいそうだと感じる。

このように、学校への道はほとんど一本道であるにも関わらず、多くの危険があることに気付いた。横断歩道を渡る、左右を確認するなど、交通ルールの基本を徹底することが必要であるとともに、車は止まつてくれるものだと過信せず、歩行者である自分も注意する必要があると感じた。

通学路以外にも習い事へ行く道、友達の家へ行く道など、自分が毎日通る生活道路にどのような危険があるのかを意識しながら歩き、危険を感じた場所は、特に注意して歩こうと感じた。また、他者と一緒に歩いてみると、自分ででは気付くことができなかつた危険が発見できるかもしれない。「自分は大丈夫」と過信せず、交通ルールを守ることはもちろん、いつでも「○○かもしれない」という意識を持ち、交通事故の被害者にも加害者にもならないようにしていただきたい。皆がこのような意識を持ち、交通事故で悲しい思いをする人が少しでも少なくなるように、日々通る道を毎日笑顔で歩ける世の中をつくっていく一員でありたい。

ヘルメットをかぶつっていても……

松前町立岡田中学校

一年 足立 穂華

私は、ドンという音におどろきました。辺りを見ると、自転車に乗っていたおばあさんとバイクに乗っていたお姉さんが倒れていました。初めて見た事故に、私はとても怖かったです。

車で家に帰っている途中だったので、車から降りて現場にかけ寄りました。おばあさんは、倒れたまま、起き上がらなかつたので、救急車を呼ぶのか迷いました。ですが、他にも助けに来てくれた人がいて、警察や救急車を呼んでくれていました。周りの人と、協力して、車道から、歩行者道路に移動しました。おばあさんは、倒れたことが記憶に無く、ヘルメットをかぶつていたけれど頭を強く打つた様子でした。一方お姉さんは、すべりこけた感じだったので、ひざに深い傷を負っていました。その深い傷を見て、私は言葉を失いました。たつた一度の不注意で、こんなにも大きなケガをしてしまうのだと、身をもつて知った瞬間でした。

その後、場所を示すため「救急隊の人に、手をふってください。」といわれたので、大きく手を振りました。救急車を見たことはあつたけど実際、このような場面で手を振つたのは初めてでした。救急車は、いつも遠くの誰かを助けるものだと思っていました。しかし、この日の出来事を境に、その認識は、一変しました。救急車のサイレンは、遠い誰かのものではなく、自分達のような身近な人達のためにあることを知りました。

私の交通安全に対する意識は、大きく変わりました。それは、おばあさんは、ヘルメットをかぶつていたのにもかかわらず、頭を強く打つてしまい、かすり傷も負つていました。その時、私はゾッとした。もしヘルメットをかぶつていなかつたら、もっと大きなケガにつながつていたかもしれないことを想像すると、胸がしめ付けられる思いました。

特に私は、自転車通学なのでヘルメットを着けるのは、習慣になっているけど初めは、少し面倒に感じることもありましたがおばあさんのケガを思い出すと、ヘルメットは、自分の命を守るとしても大切な道具なのだと改めて感じます。

努力義務という言葉だけが先行し、なぜ、ヘルメットをかぶるべきなのか、その本当の意味が伝わっていないように感じています。おばあさんのケガを見て、私はヘルメットが単なるルールではなく、命を守るための道具だと身をもつて知つたからこそ、このような状況が少し残念に思えるです。ヘルメットを持つて運転している人を見かけるたびに、「もし、あの時おばあさんがヘルメットをかぶつていなかつたら……」という思いが頭をよぎります。ヘルメットをかぶらないということは、自分で自分の命を危険にしているのと同じだと私は感じています。なので私は、身近な人たちからヘルメットの重要性を伝えたいです。

友人や家族から自転車に乗る際は、面倒くさがらず、必ずかぶるよう声をかけるようにしています。この小さな声がけが、いつか相手の心に残り、自分自身の命を守る意識へつながり、そして、その意識がまた他の人へと伝わつてほしいです。交通安全は、一人が周りの人を思いやり、小さなことから行動していくことで、初めて、成

り立つものだと思っています。車を運転する人が歩行者に気を配るように、私たち自転車に乗る側も、歩行者や車に配りよする。こうした思いやりの気持ちが安全な社会につながると思います。

今回の出来事は、私にとって、命の尊さを教えてくれた大切な教

訓となりました。この経験は、私が自転車を乗り続けるにあたって決して忘れる事はないと思おもいます。あの日のことを胸に、常に安全を第一に考え、周りの人に配りよした運転を心がけたいです。おばあさんのケガは、私にとって忘れられない教訓となりました。この経験を胸に、これからも交通ルールをしつかりと守り、安全な行動を続けていこうと心に誓っています。こうした、思いやりの気持ちが安全な社会につながると思います。そのためには、一人ひとりが交通ルールを守るだけでなく、「自分がよければいい」という考え方を捨て、相手の立場になつて考えることが大切です。私たちは、たくさんの人々に支えられて毎日を安全に過ごしています。だからこそ、自分の命だけではなく周りの大切な人たちの命を守るためにも、互いに思いやりを持つことをこれからも大切にしていきたいです。



事故の無い世の中へ

宇和島市立城北中学校

一年 高月 七々桜

みなさん、交通安全について真剣に考えたことがありますか？私はこの夏、家族で話し合う機会がありました。なぜかというと、帰省中の兄が事故を起こしたからです。幸い軽い自損事故で怪我もありませんでしたが、事故を聞いた時はとても驚きました。兄本人も、車を買つたばかりの事故でショックを受けて落ち込んでいました。

今回の事故は、誰も怪我をしなかつたけどもし誰かを巻き込んだり、兄に万が一の事があつたりしたら想像すると、とても怖くなりました。

この事故を通して、将来自分がハンドルを握った時の責任の重さや命を預かる大切さを改めて考えさせられました。

交通事故は車に限つたことではありません。私は自転車に乗るのが好きです。ヘルメットを被つて頭を守ること、スピードを出し過ぎないこと、出会い頭の事故に合わないようカーブミラーを確認したり、一時停止する事などを心掛けて乗っています。

家の周りの道は狭いけど、近くに保育園もあるので交通量が多く、小さな子供もたくさん居るので、自分が被害者にならないだけでも加害者にもならないように注意して運転しなければならないと思います。

私は小学生の頃、教頭先生の友人が事故に合つた話を聞いたことがあります。ヘルメットを被つていたおかげで大した怪我にはならな

かつたそうです。事故に合わないことがもちろん一番大切ですが、もし事故に合った時にどうすれば自分の命を守れるか考えて備える事も重要だと思います。

最近では、自転車に関する法律も厳しくなつてきました。それは、みんなの安全を守るために必要な事です。自転車も車と同じように、ルールを守つて乗る事で安全かつ便利な乗り物になると思います。

テレビでは、毎日のように事故のニュースが流れます。車同士の事故、車と自転車の事故、車と歩行者の事故、高齢者の逆走など、様々な事故が起きていています。そのほとんどが信号無視や脇見運転、居眠り運転、スピードの出し過ぎなど、少し気を付けていれば防げていた事故ばかりに思えます。誰かが少し気を付けなかつたせいで、何の落ち度もない他の誰かが亡くなつてしまつたり、大怪我を負つたりするのは、あまりにも悲し過ぎます。事故は起きてからでは取り返しがつきません。どんなに後悔して謝つても、亡くなつた人は家族の元に戻つて来ないので。その人と一緒に過ごすはずだった明日は一生訪れないのです。みなさんはハンドルを握る時、その責任を十分背負えているでしょうか。例えば、体調が悪い時は運転をしない、歩行者がいる時はスピードを落とす、交差点では譲り合うなど、日頃から一人一人が心に余裕を持って運転することで、悲しい事故は減らせると思います。

私の母は十年ほど前、ストレスから体調を崩して、めまいの酷かつた時期が二年ぐらいあつたそうです。その期間は、どんなに不便でも絶対に運転をしなかつたと聞きました。自分の身勝手な行動で誰かを傷付けてはいけないと思ったからだそうです。私はその母の考えがとても立派だと思いました。だから私も、自分の安全と共に周

りの人達の安全にも目を向けられる大人になりたいです。そうなるために、交通安全の事について今からしっかり学んでおこうと思います。そして、大人になつた時、その知識を生かして交通安全に貢献出来たら嬉しいです。

このように、交通安全について真剣に考える機会を持てた事は、私のこれからにとつてとても貴重な財産になりました。自分や家族や友人が安全で幸せな生活を送るために、今出来る事を少しずつ実践していこうと思います。また、そう考える人達が増えて、交通事故のない世の中になる事を願つています。



命を守るためにの対策

愛媛大学教育学部附属中学校

二年 井上 咲愛

周囲が真っ暗となつた冬の夕方。部活を終え、バスで帰宅する頃には、標識看板すら認識することができないほど私の視界はどこを見ても黒色に覆われています。冬は陽が落ちるのが早いため、家に到着する十八時頃であったとしてもこのような状態となってしまうのです。日没が早いと、視覚から認識する正面や曲がり角からやつてくる自動車や自転車の存在に気付けず接触し、交通事故へとつながる危険性があります。そのため、冬の下校は、春、夏、秋といった他の季節よりも一層周りの様子に注意をして行動しなければなりません。しかし、周囲の音や声をよく聴いたりするなどしてどれだけ気を配っていたとしても、五感の中で最も重要な視覚をほとんど取り入れることができなければ、今起こっている状況を理解することは非常に困難であり、不慮の事故につながりかねないと感じます。

そこで私は、冬の下校時には特に「自分の存在を主張すること」が大切であると考えます。一つは、背負っているカバンや補助バッグなどに反射キー・ホルダーをつけること。キー・ホルダーとして常時持ち歩くことで、たとえ自分が周りを見えていなかつたとしても反射の光によって相手が自分に気づいてくれることで事故を未然に防ぐ手段となると思います。もう一つは、ライトを使って周囲を照らしながら歩くこと。この方法は私が下校時に実際に対策しているものの一

つもあります。足元を照らすだけでも、周りが格段に見えやすくなるので、歩いている際に障害物とぶつかり怪我を負うといった可能性を減少させることができます。足元だけでなく、正面や真横など、さまざまな方向を明かりによつて視覚の認識を可能にするため、自動車や自転車などの接触といつた事故も減らすことができると言えます。また、ライトを照らすことで、光で反射キー・ホルダーのような役目を果たし、相手も自分の存在を認識してくれるようになります。夜道にライトを持ち歩くということは非常に大切であると考えます。暗い場所では自分がどれだけ動いて存在を伝えようとしても、相手にとつては視覚による情報の伝達がないため自分の存在が伝わりづらいです。そのため、暗い場所での光による自分の主張は、もつとも簡単に交通事故を防ぐことができる対策の一つであると考えます。

また、私は道具を使っての対策と同時に、「自分自身の行動」による対策も重要であると考えます。例えば、下校時に通る道をなるべく街灯が多い道や歩道の広い道に変更することや、自動車が通つくるかしつかりカーブミラーを見て判断すること、道路を横断する時は一度止まり、右、左、右を意識して通るといったものが挙げられます。多少家まで遠回りになつたとしても、比較的環境の良い道を通つて下校することで、自身の安心感や最も重要な安全性が得られるため必要なことであると思つています。また、寄り道やながら歩きといった「少しなら大丈夫」の気持ちから発生してしまった事故を引き起こすような行動は決してあつてはならないことです。歩行者も交通ルールはしっかりと守ること、常に正しいと思う行動を取つて事故は起こさない、起こさせない考え方で全員が対策できるようになつてもらえる

よう願っています。

私は、今まで一度も交通事故にあつた経験がありません。ですが、この先も事故にあわず、いつまでも健康に過ごすことができるといった保証はどこにもありません。これは、誰に対しても断言することができます。徹底的に事故の対策を行つていたとしても、可能性がゼロに消えることはないのです。しかし、それでも限りなく事故が起らぬないように私たちができるることは、交通に対する意識を高め、対策をすることのみです。何のために交通ルールが存在するのか、何のために信号があるのか、「何のために」を今一度改めて考えてみることで、新たな気づきが生まれるかもしれません。

このように、冬の下校時には多くの危険が潜んでいるからこそ、一人ひとりができるることを積極的に実行していくことが大切です。今回は冬の夕方の暗さの問題をテーマに考えてみましたが、出てきた対策は冬の時期だけではなくいくつもの機会に活かすことができます。普段の何気ない生活を安心、安全に過ごすことができるようになります。自身で行う日々のちょっとした心がけが重要です。そしてその心がけが少しずつ積み重なり、自分、そしてみんなの命を守るべきな力となれる世の中を待ち望んでいます。



祖父の免許返納と理想の高齢化社会

松前町立岡田中学校

二年 安村 心希

「愛媛交通死亡事故多発・緊急事態宣言・上半期、十万人当たりの死者数全国ワースト」最近見たニュースである。

毎日のように交通事故のニュースを耳にするが、特に驚いたニュースは「徳島道 高速バスとトラック正面衝突し炎上 2人死亡12人重軽傷」だ。事故をしたバスは日常よく目にしている伊予鉄バス。伊予鉄バスは安全と思っていた僕には衝撃的なニュースであつた。

あるニュース番組で事故が増えている原因として、次のようなことが挙げられていた。

- ①自動車運転手の前方不注意
- ②日照時間の長さ
- ③新年度から時間が経ち、緊張感の減少

このように原因は様々だが、一瞬で大切な命を奪ってしまう事故は、みんなの意識次第で、必ず防ぐことができるはずだ。

中でも僕が一番気になつてるのは、高齢ドライバーによる交通事故だ。アクセルとブレーキの踏み間違いによる事故や逆走である。高齢化が進む社会では高齢ドライバーが増えるのは当然のことであるが、高齢者の事故は防ぐことはできないのだろうか。

この夏、僕の祖父は免許を返納した。しかし、免許を返納するのはそう簡単ではなかった。祖父はもう八十四歳ととても高齢で、安

全な運転が次第に難しくなっていた。祖父が運転する車に乗つたとき、曲がるところを間違えそうになつたり、スピードが遅すぎて後ろの車のドライバーをイライラさせたり、視野が狭くなつて曲がつてくる車が見えなかつたりと、ハラハラすることも多くなつていた。しかし、長年無事故で安全運転をしていた祖父は、「自分は大丈夫。まだあと一、二年は乗れる。」と言つて、危ないと言う自覚はなかつた。むしろ、車がなくなると交通手段がなくなつてしまつたため、免許の返納をすごく拒んでいた。もし、もつと交通の便がよかつたら、あつさりと免許を返納すると言つてくれたかもしれない。家から駅までが遠すぎる、シャトルバスは通つていない、タクシーを乗るにしてもタクシー代が高いなど、様々な問題点があつた。だから、免許の返納はより難しくなつたのではないだろうか。僕も家族も心配で免許返納を進めた。祖父の気持ちを傷つけないように、車の運転中にイライラさせないようにしながら、事故がとても心配なことを僕なりに伝えたりもした。しかし、祖父は耳を傾けてはくれるが、「じいじは大丈夫よ。」と返納しようとはしてくれなかつた。困つた母は、祖父の事故を心配して医師に相談し、医師から話をしてもらつて免許を返納することになった。僕は本当に安心した。これまで事故を起こしたことがなかつたのに、最後の最後に事故を起こしてほしくなかつたからだ。子供が好きで、地域の環境教育を進めていた祖父。孫の僕と一緒に自由研究をしてくれたり、ご飯に連れて行つてくれたりした祖父。そんな優しい祖父の笑顔や命を守れた気がした。

祖父は無事、免許返納することが出来たが、車がなくなつた時の交通の不便さへの不安も、高齢者の交通事故に繋がつていると僕は思う。事故をなくすためには、もつと交通の便を良くしたり、免許

返納の年齢を定める法律を作つたりするなど、高齢化社会に合つたものにする必要があると思う。そうすることが高齢者のためだけではなく、社会全体のためにになると思う。

交通事故は起ころのは一瞬だけど、奪われるものは大きい。だから、自分の身は自分で守らなくてはならない。しかし、守りたくても自分だけでは守れないこともある。僕たちは、自分を守るとともに、他人を守ることも考えなくてはならない。車を運転する人は、人の命を預かっているという自覚を持つこと。自転車や歩行者も、危険を察知できなくなる可能性が高まるながらスマホ、イヤホンやヘッドホンを付けての運転や歩行はやめるべきだと思う。交通事故は被害者と加害者、そしてその家族の人生を奪つてしまう。交通事故のない社会をつくるために、僕も自分には何ができるのかを考え、行動に移していきたいと強く思つてゐる。



「交通事故を防ぐために」

大洲市立肱川中学校

一年 安川 涼

私は毎日のニュースで、交通事故の話題を目にすることがあります。事故の内容はさまざまで、小さな怪我で済むものもあれば、後遺症が残ってしまう、命を落としてしまうなどの悲しい事故まであります。私がこのテーマを考えるようになつたのは、いとこと散歩に行つたとき、見かけたことがきっかけでした。

部活も休みの日、いとこが遊びに来て、一緒に散歩に行つていると途中、スマートフォンを見ながら運転している車を何度か見かけたことがあります。ハンドルを片手で持ち、もう片方の手で画面を作してしたり、視線がずっと下に向いていたりする様子を見て、とても怖いし、危ないなと思いました。あのような状態で、もし前から人が飛び出していくようなことがあつたら、すぐに止まれるとは思いません。

交通事故の原因は、一つではありません。スピードの出しすぎ、スマートフォンを見ながらの「ながら運転」や、信号無視、歩行者の飛び出しなど、さまざまな要素が重なつて事故は起こります。特に最近では、運転中にスマートフォンを見て、運転に集中できなくなる「ながら運転」が大きな問題になつています。

ながら運転が原因で起きた事故は、実際に多数報告されています。ニュースでも、スマホを見ていたドライバーが前を見ておらず、歩行者をはねてしまつたという事件を耳にすることがあります。ドライ

バーは、「ちょっとだけ見ていただけ」「通知を確認していただけ」など、わずかな油断が大きな事故につながってしまうということがあります。

また、ながら運転は車に限らず、自転車やバイクでも起こります。イヤホンをつけて音楽を聴きながら運転したり、スマホを操作しながら、傘を差しながら、自転車に乗つたりする人も少なくありません。こうした行為も、歩行者や他の車両との接触事故の原因になります。自転車は、バイクや車ほどスピードは出ないので丈夫と思うかもしれませんが、ぶつかれば大きな怪我につながる可能性があります。

こうした事故を防ぐには、法律や取り締まりだけでなく、一人一人の意識が必要です。「自分は大丈夫」と思い込むことが、一番危険です。ながら運転の怖さは、他の事故と同様に、自分でなく、他人の命をも巻き込んでしまうかもしれないということです。自分の一瞬の油断が誰かの人生を大きく変えてしまうかもしれないという責任を持たなければいけません。

私たちができることは、まず自分自身も行動を見直すことです。歩くときも、自転車に乗るときも、スマートフォンを見るのはやめて、周りに意識を向けることが大切です。交通ルールを守るのは当然ですが、それ以上に「思いやりのある行動」が事故を防ぐ鍵になつていると私は思います。

たとえば、自分が先に止まつて相手を先に通すことで、事故を避けられるかもしれません。急いでいるときでも、「もし今スマホを見ていて誰かを傷つけたらどうなるか」と想像してみると、行動を変えるきっかけになるかもしれません。

交通事故は、他人事ではありません。誰にでも起こりうる問題です。だからこそ、私たちは「ながら運転は絶対にしない」という強い意志を持ち、日常の中で意識的に安全を守っていく必要があります。

家族や友達、大切な人たちのためにも、自分が安全な行動をとることが、周りにも良い影響を与えると思います。

私は将来、バイクと車の免許を取りたいと思っています。そのときは、交通ルールを守るだけではなく、「思いやりのある運転」ができるようになりたいと思っています。そして、今の自分にできること、たとえば自転車の安全確認や、信号を守るなどをしつかり実行していきたいです。

ながら運転による事故は防げる事故です。一人一人がしつかり責任を持ち、注意深く行動すれば、確実に事故の数を減らすことができると 思います。私はこれからも、常に周りを意識し、交通安全に対して真剣に向き合っていきたいと思います。



未来のために

八幡浜市立保内中学校

二年 松本 名里

私の家の横には道路があり、そこから少し歩けば、横断歩道がある。小学生のころ、友達と遊ぶことが増え、待ち合わせ場所に行くためには、横断歩道を渡らなければならず、いつも車が通りすぎるので待つたびに「早く行きたいのに……」とイライラ、モヤモヤしていました。あるとき、友達と遊ぶ約束をしていたが、準備に時間がかかり、予定していた時間よりも五分ほど家を出るのが遅れてしまった。いつもはどんなにギリギリでも、「しようがない」と思い、横断歩道を渡っていたけれど、その日はどうしても早く行きたくて、「まつ、いいか」という気持ちの方が勝ってしまった。私は、横断歩道のない道路を横断してしまったのだ。

その日から家を出る時間が遅くなったり、帰る時間がギリギリになつたりすると、道路を横切ることが多くなった。先生からも母からも「横断歩道がない道は危ないよ。」とたくさん言っていたのに、たつた一度ルールを破つたことで、私の中の「これくらいなら大丈夫だ」という気持ちが、どんどん大きくなつていった。そこには、罪悪感すら感じていない私がいた。

そんなある日、いつものように友達と遊んでいると、気が付けば時計の針は四時五十五分になっていた。私の家の門限は五時。叱られたくなかつた私は、何のためらいもなく、いつものように道路を横切つてしまつた。その瞬間、左車線に止まつていた車と重なつて見えなかつた右折車が、目の前に現れた。パニックになり、どうすれ

ばいいかわからなかつた私は、そのまま走つて道路を横断してしまつた。大きなクラクションが鳴つた。間一髪で私を避けてくれた運転手は、私を見て、「こんな周りが見えないとこを横断したら危ないよ。」と優しく注意してくれた。

もし、運転手の人が私を避けきれなかつたらどうなつていただろうと思うと、怖くなつた。もし、道路が今よりもっと狭かつたら、もし、後続車が何台も続いていたら……。いろいろな「もし……」が、私の頭に浮かんできた。運転手さんに対する申し訳ない気持ちでいっぱいになつた。

この件をきっかけに、私はなぜ横断歩道があるのか、どんなところに設置されているのか、なぜ横断禁止という言葉があるのかを考えるようになった。そして、歩行者側だけではなく、運転手やその車に乗つている人の気持ちも考えるようになつた。交通ルールを守ることは、自分の命を守るためにもあり、他の人の命を守ることでもある。歩行者が安心して街中を歩ける環境、運転手が安心して運転できる環境を作ることにもつながる。一人一人の心掛けや意識、そして、歩行者と運転手との意思疎通、信頼関係が大切になつてくると思う。

交通事故をなくすためには、どんな場面においても「きっと○○だろう」という楽観的な予測ではなく、「もしかしたら○○かもしれない」という危険を感じする予測が大切だと思う。そんな危険を予測する力を高めるために、毎年、私たちの学校では交通安全教室が実施されている。その授業の中で、私たちは、普段の生活の中に隠れている危険や「もしかしたら」からつながる様々な危険について、シミュレーションサイトを使って学習している。この危険予測トレーニングは、交通状況に応じた正しい観察力と危険予測能力を高め、危険を回避して交通事故を防ぐというものだ。自動車編だけではな

く、歩行者編や自転車編があり、中学生の私たちにとつても、とても勉強になる。この授業を通して、歩行者と運転手の判断のずれから起くる事故やそれぞれの不注意から生まれる危険など、様々な事例を学んだ。実際の映像を見ると、歩行者からは見えているだろうと思ったことが、運転手側からは見えていないなど、相手について理解しようとする気持ちがないことにより、危険が生まれるということが分かつた。たつた一度の判断の甘さが、大きな事故につながるということをシミュレーションサイトで実際に体験し、自分自身も被害者にも加害者にもなりうる存在なのだと実感した。こういう危険予測シミュレーションを用いた学習は、交通事故をより身近なものとして考えるきっかけを与えてくれた。

私たちが安全に地域で暮らすには、車と歩行者の意思疎通、そして、相手のことを思う思いやりの気持ちが大切だ。また、交通ルールは「守らされているもの」ではなく、「自分や周りの人のために守るもの」だと改めて思った。これから自転車に乗るときや歩くとき、そして、大人になつて車を運転するときなど、いろいろな場面で、この交通安全教室で学んだことを意識しながら、自分自身の命も家族や大切な人の命も守れるように、安全に行動したいと思う。



「自転車と私の約束」

愛媛大学教育学部附属中学校

三年 小田 和佳

私は毎朝、自転車で学校に通っています。家から学校までは三キロほど。交通量の多い交差点や、信号の多い道を通り、時間にしておよそ十五分の距離です。自転車は私にとって身近な存在で、歩きや電車よりもずっと早く学校に着くことができます。しかし、ある日、その便利さに慣れきっていた私は、交通安全の大切さを痛感させられる出来事を経験しました。

それは、三年生になつて最初のテストの日の帰り道でした。テストはいつもより早く学校が終わるので、のんびりと帰つていたら、あともう少しで家に着くというところの手前の十字路で、角から急に自転車が飛び出していました。私は咄嗟にブレーキをかけたけれど、自転車同士で正面衝突してしまいました。その時の自分の心臓は、ドキドキと早鐘のように鳴っていたのを、今でも鮮明に覚えています。幸い、お互い特に怪我はありませんでした。本当に良かったです。

中学生になつて、自転車通学を約一年半続けている中で、一番怖い思いをしました。

その場所から家までは二分くらいの距離ではあつたけれど、その間がとても長く感じ、「もしあ互いもつと早いスピードだつたら」「もし私がもつと先にいて体に直接ぶつかつていたら」そう考へると背筋が冷たくなりました。家に帰つた後、母にこの出来事を話すと、母は少し驚いた顔をしながらも、

「怪我をしなかつた本当に良かつたね。でも、交通ルールはしつかりと守ることで安全を作つていくことができるんだよ。」

と教えてもらいました。その言葉が、私の胸に深く刺さりました。それから私は、自転車に乗る時のルールを自分なりに三つ決めました。一つ目は、歩行者や車が近くにいるときは、スピードを場面に合わせて落とすこと。二つ目は、人通りの少ない十字路や住宅街でも耳を周囲に傾け、音にも集中すること。最後の三つ目は、自転車に付けているミラーや道路に立つているカーブミラーをより上手く利用して安全に努めることです。これらを意識していくことで、落ち着きを保つて、時間と心に余裕が生まれるようになります。実際にやつていると、前までは朝急いで走つていていたのが、少し早めに家を出発して安心してペダルを漕げるようになり、自分の日々の生活習慣も改善されている気がします。そんな日が続いた数日後、事故に遭つた同じ場所で、すぐ目の前で自転車が横から走つてきたのを見ました。前の私なら何も考えずに普通に進んでいたと思います。でも、そのとき私はスピードを落として十字路にあるカーブミラーを確認して渡りました。何気ない出来事が一つ一つ積み重なつていくことで心がとても温かい気持ちになります。

私は、高校生になつても自転車に乗り続けることになります。交通ルールを守り、安全を一番とすることは欠かせません。また、安全運転は自分の身を守るだけでなく、周囲の人にも安心感を与えることを、今回の件を踏まえて実感しました。

学校でも標識を守ること、事故の大半はわずかな油断から起こることなどの重要な交通安全について先生からお話をいただくことがよくあります。自分で決めたルールも学校で教わつしたことと一致して

いる内容がほとんどです。言われなくても、本当はルールをしつかりと決めなくとも、当たり前に交通に対して理解を深められる人になりたいと考えています。

自転車は、便利で環境にもやさしい乗り物です。しかし、便利さの裏側には常に危険が潜んでいます。ちよつとした一瞬の油断や焦りが、事故へとつながっていくことを忘れてはいけません。自分の生活に欠かせない自転車だからこそ、より意識して歩んでいくことが必要です。慣れている道ほどルーズになりやすくなるので、まずは私のよく使う道からその意識を広げていきたいです。

この経験を通して学んだことを、私はこれからも、ただペダルを漕ぐだけでなく、安全という心も一緒に乗せて、進んでいきます。



事故は突然やつてくる

松山市立三津浜中学校

三年 小林 悠人

昨年の五月末、母が台所で夕飯の準備をしていると、母のスマホが鳴りました。父からの電話でした。私はちょうど部活が休みで家にいたのですが、変な時間にかかってきたなどと思いました。会話の内容は「帰宅途中、バイクで事故にあつた。これから病院に運ばれて、おそらく検査を受ける。大丈夫なので来なくて良い。」と言うものでした。当たり前のことですが、とても驚きました。父と母はいくつかやりとりをし、母は最後に

「やつたんか？やられたんか？」

と聞きました。父はとても答えにくそうに、「当てられた。」

と答えたそうです。母は電話を切り、私たち兄妹三人に向かつて「怪我の大きさは分からんけど、意識もはつきりしとるし、大丈夫。とりあえずいつも通りご飯食べよう。」

と言いました。弟はそわそわしていましたが妹はよくわからなかつたようで、不思議そうな顔をしていました。

しばらくして、またスマホが鳴りました。父から「検査の結果を説明するときに、家族の付き添いがいるらしい。一人で大丈夫、と言つたけど駄目だつた。きてくれないか。」という電話でした。夜、子どもだけでは家にいられないでの、母はすぐに隣に住む祖父母へ応援を頼みに行きました。そして私たちに

「大丈夫だから、寝ときなさい。」

と言つて病院へ出かけました。それから一度「傷だらけの父に会えた。」と言う連絡があつたきり、深夜に帰つてくるまで連絡はなかつたのですが、私はとても心配になりました。この出来事によつて、私は事故の本当の怖さを知ることになりました。

後になつて母にあの日のことを聞くと、

「どう見てもだめなのに、歩く歩くと言つて事故現場へバイクを取りに行つた。アドレナリンがブシャーッと出とつて、痛みに気づかなかつたんやと思う。検査で異常はなかつたと聞いとつたけど、後から出てくる異常もあると言われたけん、帰つてから夕飯を温めている間にお父さんが寝てしまつて、本当に怖かつた。でも、一階で寝たら？とか、もう少し冷やしこう？って言つても全然言うこと聞かんかつた。アンタとそつくり。」

と言つて笑つていきました。次の日に見てみると、手足は傷だらけで、足は紫色に二倍近くに膨れ上がり、どこからどう見てもけが人で、よく帰つてこれたなあと思いました。

事故に遭う可能性は誰にでもあると思いますが、私は父が事故に遭つたことがとても意外でした。私の父は運転に関しては子供の目で見てもとても慎重なので、父の不注意によるものだとは思えなかつたのです。事故の原因を聞いてみると、バイクでまっすぐ走つていたところ、反対車線から急に車が曲がつてきて、避けきれなかつたそうです。相手の車の運転手さんは、ひたすら謝つていたと話していました。また、今年の四月には松山市内で中学生の自転車事故がありました。事故のニュースを見た日には、単に「怖いなあ。」としか思わなかつたのですが、後日事故にあつたのは部活の後輩の友達で、事故以来

意識が戻つていないことを知り、怖さが二倍にも三倍にもなりました。

交通事故は、事故にあつた人だけではなく、家族の生活を大きく変えます。母は毎日傷の手当てをし、怪我人のお世話という仕事が増えました。祖父は、病院や警察への送迎をしてくれました。弟妹は「遊んでもらえない。」と残念そうでした。また、仕事を三週間休み、職場の方に仕事の穴埋めをしてもらいました。交通事故は、事故の当事者だけではなく、周りの多くの人をも巻き込むなど痛感しました。小学校では、一年生で歩き方教室、三年生で自転車教室等交通安全指導が行われています。それから六年が経ち、事故を起こさない、事故に遭わないためにどんなことに気をつければ良いのかぼんやりとしか思い浮かばなかつたので、調べてみました。すると「安全運転五則」というものを見つけることができました。

○安全速度を必ず守る。

○カーブの手前でスピードを落とす。

○交差点では必ず安全を確かめる。

○一時停止で横断歩行者の安全を守る。

○飲酒運転は絶対にしない。

今までなんとなく…で気をつけていた点が、文字にすることではつきりしました。

父の事故をきっかけに、これまで以上に交通安全に対する意識が高まりました。

「どんなに気をつけても事故は起くる」と言うことを忘れず、日々気をつけて行動したいと思います。

事故を未然に防ぐために

久万高原町立久万中学校

三年 丸山 莉央

「事故」この言葉は、毎日目にしたり、耳にしたりする。それほどいつどこで発生するか分からぬ身近なことなのに、私はどこか他人事のように思っていた。目の当たりにしたことがないからだ。しかしこの考えが一瞬にして消える出来事があった。

二年前の夏、祖父、祖母、母、弟、私の五人で出かけた帰り道、運転席のすぐ後ろの席で眠っていた私。「ドン！」経験したことのない衝撃で目を覚ました。何ともいえない臭い匂い、車の前方から白煙、ガラスが散乱した車内。怒る祖父、私たちを心配する祖母、恐怖のあまり放心状態の弟、そして血だらけの母。「事故に遭ったんだ」とすぐに分かった。救急車が来るまで何もできず、じわじわと顔が腫れる母を見て、恐怖心だけが大きくなつた。時間の経過が遅く感じた。しばらくして救急車が到着し、車から脱出できたとき、もう大丈夫と安堵した。救急搬送され検査したところ、私たち姉弟は軽傷だった。しかし母は、外傷性くも膜下出血と顔面多発骨折の重傷だった。そして、HCUに入院した。

母の経過は良好で、三日後に退院した。家族が揃い嬉しかったが、生活は一変した。弟は事故の恐怖心から、外に出ることが怖くなり、学校を休むようになった。私は体の痛みがあり、部活が思うようにできなくなつた。そして、退院したものの絶対安静の母。今まで家

のことは全て母一人でこなしていたが、この日から会社を休んで父ができるようになり、弟と私も自分ができることをした。その後、私は二ヶ月、弟は半年通院した。母は手術し、二年経つた今でも通院している。

私が遭った事故は、下り車線を走っていた二tトラックがセンターラインを越えてきたことによる正面衝突だつた。スピードの出し過ぎかな、脇見運転かな、居眠りかな…。私は、トラックの運転手に強い怒りを覚えた。気をつけてさえてくれてたら、事故に遭わなかつたのに…と。

後日、警察官から、「事故の原因は、トラックがスリップをしたことにによるセンターラインのはみ出しである。スリップしたら、ハンドル操作はできにくくなる。ブレーキも効かない。でも、おじいちやんがぶつかる直前にハンドルを左に切つたから、事故は最小限に抑えられた。」と聞いた。スリップしてしまつたら、ハンドルもブレーキも制御不能になることを初めて知つた。交通ルールを守り、どんなに気をつけていても防ぐことのできない事故もあるのかもしれないと思つた。同時に、咄嗟の行動で被害を抑えられることを知つた。

事故に遭つてから、以前よりも事故に関する記事に目が止まるようになつた。最近最も印象に残つてゐる事故は、今年七月に発生したトラックと高速バスの事故である。通つたことのある道で、また利用したことのある高速バスの事故である。頭から離れなかつた。事故の原因は、トラックのタイヤがバーストしたことにより、センターラインを越え、高速バスと正面衝突したことのようだ。私が遭つた事故と似ていた。

どちらもタイヤの異変で発生した事故。スピード超過や飲酒運転

など運転手に明らかな過失がある事故ではない。走行中に突然異変が起り事故になった。見防ぎようがない、不運であると思うかもしれない。しかし、車に乗る前にタイヤを見て、擦り減っていないか、ひび割れが入っていないか、など異変がないかチェックしていたら、未然に防ぐことができた事故かも知れない。

今、この瞬間にもどこかで交通事故は発生している。どこにもぶつけることのできない悲しみや怒り、不安や絶望、激しい喪失感を抱く人がいる。私も事故に遭ったからこそ、事故は減らしていかなければならぬと強く思う。交通ルールを守る、車検を受ける、といった義務付けられている最低限のことはできている人が多い。しかし今一度、ハンドルを握る前に、万全な体調であるか、車も異変ないかチェックしてほしい。小さな異変や一瞬の判断ミスから事故は発生し、大切な人や見ず知らずの人の人生を大きく変えてしまう可能性があることを改めて考へるべきだと思う。そして運転手、歩行者：全ての人が、心と行動にゆとりと思いやりをもち、「～かもしれない」と悪い状況を想定して行動してほしい。そうすることによって、事故を一件でも多く未然に防ぐことができると私は思う。社会全体が一步進んだ心遣いのできる世の中になることが私の切実な願いだ。

僕たち子供にとつて一番身近な乗り物「自転車」。小学生の頃から乗っているものだから、緊張感や危機感を持つて運転している人は、少ないのでしょうか。しかし、自転車は道路交通法上「軽車両」に分類されるため、事故を起こした場合は、自動車と同様に届け出さなければなりません。

政府統計の総合窓口というサイトに「上半期の交通事故の特徴及び道路交通法違反取締状況について」という項目があります。その中にある「状態別死者数の推移」というデータを見てみると、自転車乗用中の事故で亡くなつた方は今年上半期で百三十九人、全事故死者数の十二・〇パーセントを占めていました。さらに「自転車乗用中のヘルメット着用有無別死者数の推移」のデータから、自転車事故死者数の八十九・二パーセントはヘルメットを着用しなかつたということが分かりました。また、七月三十日の愛媛新聞にも「自転車事故の死者数は百三十八人で、半数以上が主に頭部に損傷していた」とあり、これらのことからヘルメットの着用が命を守ることにつながることが読み取れます。

そして、この夏、僕はヘルメットの大切さを深く実感することがありました。自転車乗用中に車と衝突したのです。

その日、僕は図書館に行こうと、毎日通る家の近くの横断歩道を自転車で渡っていました。いつも通り渡つて、その後もいつも通りの

ヘルメットの重要性

大洲市立天洲北中学校

三年 宇都宮 巧

日常があるものだと思っていました。しかし、気付いたら道路に倒れていたのです。全く訳が分からず、自分から数メートル離れた所に車が止まっていたので、とりあえず、「大丈夫ですか？」

と、車中の女性に声を掛けました。反応がなく、お互い戸惑つているうちに警察官が来て、僕を近くの家の日陰スペースに案内してくれました。ちょうどパトロール中だったようです。その後は警察官の言うとおり母に電話して、近所の飲食店の方の手当てを受け、救急車で病院に行きました。僕も母もこの時は事故状況より、怪我のことでの頭が一杯でした。

怪我はCT検査もしましたが、幸い沢山の擦り傷で済みました。しかし、後日、介抱してくれた飲食店の方や修理依頼した自転車店の方の話を聞き、この程度の怪我で済んだことが奇跡と思うと同時に、ゾッと怖くなりました。目撃者の話では、ドンとすごい音がして、自転車が空を飛んだらしく、自転車は全損、ヘルメットは擦った跡や小さい穴があつたそうです。考えてみると、擦り傷もヘルメットから出ているこめかみ付近とその下の肩が一番ひどかつたことから、ヘルメットがなかつたら……。そう思うと、ヘルメットに非常に感謝しました。

僕が住む愛媛県は、ヘルメットの着用率が約七〇パーセントで、これは全国一位の着用率です。僕も自転車デビューした時から、当たり前のようにヘルメットをかぶっていました。しかし、この僕の当たり前は交通事故で息子さんを亡くされた渡邊明弘さんの『もう誰にも自分のような後悔をしてほしくない』という強い思いや活動、愛媛県のいち早い取り組み、愛媛県民の皆で命を守ろうとする意識や、

着用しているのが当たり前という環境があつて築かれたものだと思います。僕がそうであつたように、車とぶつかった衝撃で意識がなかつたら手で頭を守ることはできません。もし意識があつたとしても、守り切れるかどうか分かりません。だからこそ、ヘルメットは必ず着用しようと思いました。

ヘルメット着用だけではなく、今回の事故で交通ルールを守る、周りを過信せず焦らず譲り合う精神が大切なことも学びました。自転車は車両なのに、僕は乗つたまま横断歩道を渡つていました。「このくらいなら」という気持ちがあつたから、事故が起きたのだと後悔しています。擦り傷で済んだ今回の事故でも、たくさんの人にお配や迷惑を掛けてしまいました。皆を不幸にしてしまう交通事故。二度と起こさないように一層注意したいと思います。



大切な命を守るために

西予市立三瓶中学校

三年 井上 玄

ヘルメットを被つていても、命を落とすことがあります。より身近な出来事として、僕自身の経験による気付きが大きいです。雨が止んだあとに自転車で出かけたときのことです。左折しようとハンドルを切ったところ、道路が濡れていた影響で自転車のタイヤがスリップしました。僕は体勢を崩し、自転車ごと転倒しました。次の瞬間、体が道路の白線からはみ出し、後ろから来た車にひかれそうになりました。あと數十センチずれていたら人生が変わっていたかも知れません。当時のことを思い出すと、今でもぞっとなります。もし、あのとき正しくヘルメットを被つていなかつたら、大きな事故の被害者になつていたかもしれません。雪道でも何度かスリップして転びそなり、ヒヤリとしたことがありました。それまで事故はどこか他人事のように感じていましたが、僕自身が当事者となつたことで、ヘルメットが命を守るための必需品であることを身をもつて実感しています。また、ただ被るのではなく、正しく被ることが大切だと思いました。

今回、母からラジオの話を聞いて、交通事故について改めて考えきつかけとなりました。交通事故は遠い昔、遠いところで起こつていた出来事ではありません。毎日のように自転車に乗っている僕にとっては、いつでも起りうるものだと自覚しています。だから、これからも僕は、自転車に乗るときは必ずヘルメットを被ります。雨や雪の日には早めに家を出たりライトをつけたりして、慎重に運転が自転車と決して軽く考えてはいけないと思いました。

僕にとって自転車は、今や生活の一部分。通学や買い物の行き帰りなど、様々な場面で欠かすことのできない身近な乗り物です。ヘルメットの着用は、学校や社会のルールとして義務付けられています。だから、僕は小学生の頃からずっと、どんなに短い距離でも必ずヘルメットを被り、それを当たり前のこととして続けてきました。

母が僕に「ラジオで背筋の凍るような話をしていたよ」と話しつけてきました。女人人が男の人には「金のヘルメットと銀のヘルメット、あなたが落としたのはどちらのヘルメットですか」と尋ねたそうです。それを聞いて僕は、どこかで聞いたことのある話だなと思いました。この後、男の人は「落としたのは白いヘルメットだ」と返答します。すると、女人人は「あなたが本当に落としたものは命です」と言つたそうです。母は僕に「これ、怖くない?」と真剣な顔で聞いてきました。僕はその一言でこれは遠い過去の話ではなく、身近に起きている出来事なのだと察しました。

テレビでは、歩行者と自転車がぶつかって歩行者が怪我をしたとか、最悪の場合なくなつてしまつたとかいうニュースが流れています。それを耳にする度、僕は自転車が大きな事故を引き起こしていることに恐怖を感じています。それは、毎日乗っている自転車が、一瞬にして誰かの命を奪う危険性をはらんでいると思ったからです。たかが自転車と決して軽く考えてはいけないと思いました。

しようと思います。ちょっとした油断が大事故につながることを忘れずにいたいです。

もし、友達がヘルメットを被ることを面倒がるようなことがありますば、このラジオの話をしようと思います。相手がヘルメットのことを、命を守る大事な道具だと気が付けるように関わりたいです。そして、みんながヘルメットを正しく被ることで、交通事故のない明るい社会を作つていきたいです。

命はひとつしかありません。一度落としてしまって、もう一度と戻つてくることはありません。自分の命に責任が持てるのは、自分だけだと思います。自分の命も、周りの人の命も平等に大切にできる人でありたいです。その一歩として、僕はこれからも交通ルールを守り、安全に運転していきます。



自転車にTSマークを貼りましょう！！

◇ TSマークには、保険が付いているので安心



TSマーク付帯保険の補償内容	赤色 TS マーク	緑色 TS マーク
賠償責任保険 (被害者が死亡等した場合に、法律上の損害賠償責任を負った時の補償)	○死亡・重度後遺障害 (1~7級) 限度額 1億円	○死亡・障害 (すべての人身事故) 限度額 1億円 示談交渉サービス付き
傷害保険 (自転車利用者が死傷等した時の補償)	○入院 15 日以上 10 万円 ○死亡・重度後遺症害 (1~4 級) 100 万円	○入院 15 日以上 5 万円 ○死亡・重度後遺症害 (1~4 級) 50 万円
被害者見舞金 (被害者が入院した時の見舞金)	○入院 15 日以上 10 万円	○入院 15 日以上 賠償責任補償により対応

思いやり1.5m運動の実践を！



愛媛県では、「愛媛県自転車の安全な利用の促進に関する条例」の基本理念として、歩行者・自転車・自動車等がお互いを思いやり、安全・快適に道路を共有する「シェア・ザ・ロード」の精神の普及に努めており、ドライバーの皆様には、自転車を追い越すときの事故防止のため、「思いやり 1.5 m」運動の実践を呼びかけています。

ドライバーの皆様は、自転車の側方を通過すときは 1.5 m 以上の安全な間隔を保つか、道路事情等から安全な間隔を保つことができないときは徐行していただきまますようお願いします。

交通安全協会のご紹介

① 一般社団法人 愛媛県交通安全協会

松山市勝岡町1163-7 電話：089-979-2101

ホームページ：<https://www.ehime-ankyou.or.jp/>

② 各地区交通安全協会一覧表

協会名	所在地	電話番号
宇摩	四国中央市三島中央5丁目4-20	0896-23-5331
新居浜	新居浜市久保田町3丁目9-8	0897-32-3260
西条	西条市新田133-1	0897-55-9911
西条西	西条市周布349-1	0898-64-1661
今治	今治市旭町1丁目4-2	0898-33-3466
伯方地区	今治市伯方町木浦甲4639-1	0897-72-2911
松山東	松山市勝山町2丁目13-2	089-941-7810
松山西	松山市須賀町5-36	089-951-1725
松山南	松山市北土居3丁目6-17	089-958-6558
久万高原	上浮穴郡久万高原町久万542-4	0892-21-0211
伊予	伊予市下吾川960	089-982-7081
大洲	大洲市東大洲1686-1	0893-25-0334
内子	喜多郡内子町内子1432	0893-43-0116
八幡浜	八幡浜市広瀬2丁目1-5	0894-24-4895
西予	西予市宇和町卯之町4丁目659	0894-62-9676
宇和島	宇和島市並松2丁目1-30	0895-23-0027
鬼北	北宇和郡鬼北町大字芝225-1	0895-45-0277
南宇和	南宇和郡愛南町御荘平城2982-2	0895-70-1311



交通安全年間スローガン最優秀作

○ 子供の部門（小・中学生からの応募／過去十五年間の内閣総理大臣賞）

平成二十四年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
二十五年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
二十六年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
二十七年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
二十八年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
二十九年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
三十一年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
三十二年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
三十三年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
三十四年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
三五年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
三六年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
三七年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
三八年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
三九年 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
三十一年 令和二年 自転車は 車といつしょ 左側
三十二年 とび出さない いったんとまつて みぎひだり
三十三年 しつかりと 止まってかくにん 横だん歩道
三四年 自転車に 乗るならきみも 運転手
三五年 とうげこう よそみ おしゃべり きけんがいっぱい
三六年 べだるこぐ ぼくのあいぼう へるめつと
三七年 わたるまえ わすれずかくにん みぎひだり
三八年 青だけど 自分の目で見て たしかめて
三九年 車から ぼくたちみえない 手をあげよう

～ 愛媛県交通安全協会ホームページ 広告協賛事業所 ～

【四国中央市】

金生運輸(株)
大王製紙(株)

【新居浜市】

一宮運輸(株)
(株)大石工作所
桑原運輸(株)
住友化学(株) 愛媛工場
住友共同電力(株)
住友金属鉱山(株) 別子事業所
住友重機械工業(株)
愛媛製造所新居浜工場
宝運送(株)
東予信用金庫
日泉化学(株)
(株)三好鉄工所

【西条市】

(株)田窪工業所

【今治市】

(株)IJC
今治造船(株)
今治ヤンマー(株)
愛媛県警備保障(株)
四国ガス(株)
四国通建(株)
四国陸運(株)
瀬戸内運輸(株)
BEMAC(株)
真鍋造機(株)

【松山市】

あいおいニッセイ同和損害保険(株)
愛媛支店
アカマツ(株)
(株)アクセル松山
アサヒビル(株) 西四国支店
(株)アテックス
アトムグループ
(株)アベホンダ
Honda Cars 松山北

池田興業(株) 四国支店

(株)ISEKI M&D

(株)伊予銀行

NTT西日本 四国支店

(株)愛媛銀行

(株)愛媛CATV

(一社)愛媛県警備業協会

(一社)愛媛県指定自動車教習所協会

(一社)愛媛県自動車整備振興会

愛媛県二輪自動車協同組合

愛媛県遊技業協同組合

愛媛自動車販売協会

(株)愛媛新聞社

愛媛信用金庫

愛媛綜合警備保障(株)

愛媛ダイハツ販売(株)

えひめ中央農業協同組合

愛媛トヨタ自動車(株)

愛媛トヨペット(株)

愛媛日産自動車(株)

才才ノ開発(株)

(株)門屋組

(株)ガリレオコーポレーション

学校法人 河原学園

(株)かんぽ生命保険

(株)北四国警備保障

こくみん共済 coop

JA共済連 愛媛

JAバンクえひめ

四国電力(株)

四国名鉄運輸(株)

四国旅客鉄道(株)

JAF愛媛支部

(株)SHINWA

(株)スズキ自販松山

(株)セキュリティエヒメ

(一社)全国道路標識・標示業

四国協会 愛媛県支部

全国農業協同組合連合会

愛媛県本部

(有)大豊陸送

(株)たいよう共済 愛媛支店

太陽石油(株) 四国事業所

(株)タカラレーベン

帝人(株) 松山事業所

(株)テレビ愛媛

東京セフティ(株)

トヨタ L&F西四国(株)

(株)トヨタレンタリース西四国

(株)TRUST LINK

日本郵便(株) 四国支社

フェイス・ソリューション・

テクノロジーズ(株)

(株)フジ

(株)フジセキュリティ

(株)フードサポート四国

ヨシケイえひめ

三浦工業(株)

(株)村上モータース

(株)四電工 愛媛支店

【伊予市】

旭警備保障(株)

マルトモ(株)

【伊予郡松前町】

東レ(株) 愛媛工場

日章(有)

【東温市】

KOKUDO(株)

(株)ヒカリ

【伊予郡砥部町】

医療法人 誠志会 砥部病院

【大洲市】

(株)一宮工務店

【八幡浜市】

(株)サンリード

八水蒲鉾(株)

堀田建設(株)

【宇和島市】

宇和島自動車(株)

宇和島信用金庫

令和7年12月1日現在 100事業所

交通安全活動を支援しています。

〒799-2661 愛媛県松山市勝岡町1163-7

TEL : 089-979-2101



一般社団法人
愛媛県交通安全協会
Ehime Traffic Safety Association